アーノルド＝ローベルになって『ふたりは○○』のお話をつくろう

発行
令和元年 12 月６日
中部教育事務所

授業者　上田さなえ教諭（土佐市立蓮池小学校）

単元　第２学年　国語　お手紙（光村図書２下）

単元計画（全１０時間）

第１次　１時　「お手紙」、関連図書、他校２年生の創作した話を読み、がまくんとかえるくんを登場人物とした話を創作するというゴールイメージをもつ。

２時　関連図書を読み、二人の行動や会話から想像できる二人の特徴が表れているところ（～くんらしいところ）を見つける。

第２次　3,4 時「お手紙」の話の大体を捉える。

５時　場面の様子に着目して登場人物の行動を具体的に想像し、「がまくんらしい」ところや「かえるくんらしい」ところを見つける。

・見つけたことを付箋に書き、自分の全文シートに貼っていく。

６時　「かえるくんらしい」ところを話し合う。

本時　７時　「がまくんらしい」ところを話し合う。

（３～７時）関連図書も活用し、お話ポケットに自分が話を作る際に使えそうな、「がまくんだったらこうしそう、こんな言い方をする…」などの作話のためのアイディア（以下「話のタネ」とする）を入れる。

第３次　８時「お話のタネ」をもとに、自分が創作する話の大体を考える。

９時　アーノルド＝ローベル風の話を完成させる

10 時　できあがった話を読み、感想を伝え合う。

本時で達成したい目標

◇がまくんについて会話や行動から、具体的に「がまくんらしさ」を想像することができる。

本時における深い学びとは

◇がまくんらしさが見られる文章を叙述より選び、そこから「がまくんらしさ」を想像し、それらをもとに、自分が作る話に使えそうな、がまくんに関する「話のタネ」を考えている。

授業の概要

本単元は「『お手紙』の作者アーノルド＝ローベルになって『ふたりは○○』の絵本をつくろう」という言語活動を設定した。第２次では、作者になりきって、がまくん、かえるくんの話が作れるように二人の行動や会話に着目し、具体的に想像しながら読む。自分が読み取ったり、友だちの考えを聞いたりすることで、『ふたりは○○』の話を作るためのタネを貯めていく。

本時の展開

学習活動	指導上の留意点
1　本時の課題をつかむ 前時に「かえるくんらしさ」をたくさん見つけたことを振り返って、本時の学習の見通しをもつ。	・「かえるくんらしさ」を見つけた前時の板書をふりかえることで、「今日はがまくんらしさをたくさん見つけよう」という意欲をもたせる。
2　それぞれが見つけた、「がまくんらしい」ところを友だちと交流する 個々の全文シートを広げ、自分が見つけた「がまくんらしさ」を友だちと交流する。	・交流を通して、発見したことを青鉛筆で書き加えさせる。色分けをすることで学びの広がり、深まりを意識させる。
3　見つけたことを全体で共有する それぞれの発言をもとに、「がまくんらしさ」をまとめる。	・児童から出た意見は、文章のどの言葉からそう思ったのかということを可視化できるよう、全文シートに書き込んでいく。
4　学習を振り返る	・今日の学習をもとに、自分の話に生かしたい「がまくんらしさ」を書き、話のタネとして貯める。

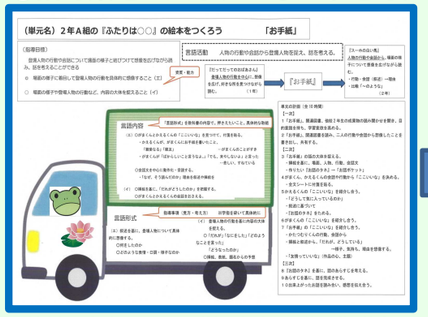
授業研究会のポイント

①精査・解釈したことをもとに、話を作る。

〔お話ポケット〕

「がまくんらしさ」「かえるくんらしさ」「アーノルド＝ローベルの書きぶり」を叙述より読み取った子どもたちは、学んだことを生かして話のタネをお話ポケットに入れていく。「こんながまくんをタネにしよう」「もしかしたらがまくんは、こんなことをするんじゃないかな」などと、子どもたちは今日の学習で自分が想像したこと、みんなで話し合って考えたことをもとに書く。関連図書を読む際も同じ視点で、「がまくんだったら、こんなことをしそう」などと、タネを入れていく。

②指導案を工夫し、つながりを可視化



教材研究会ではこの単元構想と学習指導案のセットで提案

授業研究会では、この２枚を学習指導案として提案

９月２７日の教材研究会を受けて、学習指導案の様式を見直した。大きく変わったところは、①資質・能力の系統が書かれたこと、②本単元で資質・能力を育成するために働かせたい見方・考え方の具体の姿が書かれたこと、③本時の展開も含めてＡ３用紙２枚にまとめたことである。

学習指導案は参観者（読み手）に必要な情報を提供する説明文であり、相手意識をもって書くことが必要である。そのために、単元の終末における、資質・能力を身に付けた児童の姿を明確にする。そして、子どもがどのような見方・考え方をどのように働かせるのかを可視化したり、言葉の力の系統性や言語活動の系統性を明示したりすることが大切である。

※11 月８日の指導案は蓮池小学校のホームページにアップされています。ご参照ください。

③全文シートの有効な活用法

本時では、がまくんの会話や行動から登場人物について具体的にイメージし、「がまくんらしさ」を見つけ、それぞれの見方を交流した。交流の道具となったのが、全文シートである。会場となった体育館の床に広げられた全文シートには、根拠となる叙述に引かれた線や、見つけた「がまくんらしさ」「かえるくんらしさ」がびっしりと書き込まれており、子どもたちは言葉を指し示しながら、友だちと交流をしていた。また、全体交流の際にも、前に貼られた全文シートに子どもの発言した「がまくんらしさ」を書き込んでいくことで、友だちの発言を自分の考えと比較したり関連付けたりすることができ、理解が深まった。

子どもにとっては、全文シートは「物語を読み取るため」「文章を通じて友だち同士で対話をしたり交流をしたりするため」「自分が思ったことや考えたことを説明するため」の道具である。

言語能力は見えにくいものであるが、全文シートに書き込むことで、子ども自身が自分の見方・考え方やその成長をメタ認知することへの助けとなり、また教師も子どもの「読み」を見取ることができる。「ねえ、どうしてそう思ったの」「わたしも同じように思ったけれど、理由の場所が違うよ」など交流をする際に、お互いの見方・考え方を共有することで、子どもたちの学びが深まる。